

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年八月十九日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

狂言 咲嘩(さっか)

都の伯父に連歌の宗匠を頼もうと、主人が遣わした太郎冠者は、市中で「伯父御様」と連呼して、名乗り出た男を連れ帰ります。主人が物陰から顔を見ると、大盗人の見乞い(見た物を奪う意)の咲嘩でありました。事を荒立てず、適当にあしらって帰そうとする主人の迷惑を、太郎冠者のまことに愚鈍な言動が悉く消し飛ばしますが、その並外れた不調法ゆえに、さしもの咲嘩も翻弄されて、打たれ、こかさされ、思わぬ天罰が下ります。

能 橋弁慶(はしべんけい)

北野へ丑の時詣でに行く弁慶(シテ)を従者(ツレ)が引き留めて、五条の橋に曲者の出ることを教えます。従者が昨夜目撃したところでは、きやつは十二三歳の小男ながら、小太刀を取れば蝶鳥のごとく、目にも留まらぬ神わざゆえに、さすがの弁慶でも討たれるのは必定(ひつじょう)というのです。そう聞いて断念しかけた弁慶は、聞き逃げを本意として、曲者退治の覚悟を決め、夜の更けるのを待ちます(中入)。さて秋風吹く五条の橋では、明朝寺へ上る牛若(子方)が最後の相手を待ち受けています。そこへ橋板を荒らかに踏む音がして、大鎧・大長刀の弁慶が通り掛かります。薄衣(うすぎぬ)で女装した牛若はすれ違いざま長刀を蹴上げ、月下に火花散る超人二人の決闘が始まります。身のこなしといい、太刀捌き(さば)といい、まこと神変(じんぺん)奇特(きとく)の牛若にはさしもの弁慶も討ち取る術(すべ)がなく、ついには呆然(ぼうぜん)と立ち尽くし、互いに名乗り合(な乗りあ)って主従(しゅじゆう)の契約(けいやく)を交(ま)わし、九条の御所へ同道(どうだ)するのです。

(西村 聡)

装束附 前シテ(武蔵坊弁慶)

沙門帽子をかぶり、厚板を着附に着て、白大口をはき、上に水衣を着て、腰帯をしめ、小刀をさす。

後シテ(前シテと同じ)

袈裟頭巾をかぶり、厚板を着附に着て、半切をはき、上に袷被を着て絞上げ、腰帯をしめる。

終了予定 午後八時二十分頃